

# 「CSRレポート2009」に対する

## 第三者意見

特定非営利活動法人  
「循環型社会研究会」代表  
**山口民雄**

プロフィール  
新聞社に25年勤務後、ベンチャー企業  
広報、出版社雑誌編集を経て、フリー。  
関東学院大学経済学部非常勤講師。  
1989年以降「地球環境問題と企業活  
動」に関心を抱き現在に至る。

循環型社会研究会  
次世代に継承すべき自然生態系と調和した循環型社  
会のあり方を地球的視点から考察し、地域における市  
民、事業者、行政の循環型社会形成に向けた取り組み  
の研究、支援、実践を行うことを目的とする市民団体。  
<http://www.nord-ise.com/junkan>



本意見は、報告書作成過程で開催した2回の意見交換会を踏まえて執筆しています。意見交換会では、報告書作成担当者の方々と腹藏なく意見を交わすことができ、また、村瀬昇也執行役員も時間を割いていただきました。昨年も同様の意見交換会を開催していただきましたが、検討課題として積み残した内容もありました。しかし、本年は、「2009年版で対応、2010年版で対応、今後検討」など「対応一覧表」を作成するなど、積極的な対応をしていただきました。第三者の声に耳を傾け、その声をさまざまな場面で反映していくことは、CSRの本質の一つであり、報告書作成以外にも発展されることを期待します。

2008年度は米国のサブプライムローン問題に端を発した金融危機が实体经济にも大きな影響を与え、ジェイテクトを取り巻く経営環境も非常に厳しい状況でした。しかし、こうした時こそCSRに対する“本気度”が問われています。同社では、こうした状況下、自社のCSRを再定義し、CSR推進委員会を立ち上げ、CSR方

針を策定されました。そして横山社長は緒言で「社員一人ひとりがグローバル企業として、持続可能な豊かな社会づくりにどう貢献すべきかを真剣に考え、議論し、実行に移していくことがジェイテクトのCSRにおいて、とても重要」と明言されています。厳しい状況下でのCSR推進のための枠組み作りやこうした明言は“本気度”を証明しているといえるでしょう。こうした社内での動向が報告書にも色濃く反映しています。報告書の全体のトーンからは「CSRの新しいステージ」に入った熱意が伝わってきます。その代表例はCSR委員会を構成するワーキンググループのメンバーによる座談会です。参加者一人ひとりの発言内容が大変具体的でかつCSRの本質に根ざしており、社員を牽引する内容です。今後は、一般の社員の方が参加者と同様に「真剣に考え、議論し、実行に移す」ために、CSR活動のロードマップを示し、さまざまな施策を展開してください。そのプロセスが、報告書に反映されるならば真に顔が見え、活動のダイナミズムが伝わる報告

書になることでしょう。情報の開示面でも前進するとともに、記述も丁寧になってきています。統計数値では企業倫理相談窓口への相談件数、精神系疾患による休業者の状況、長時間労働者検診受診者数、グローバルCO<sub>2</sub>排出量・原単位推移などが印象に残ります。また、2008年度は雇用が社会問題化しましたが、報告書では期間社員の雇用維持、雇用調整に当たったの対応が明記されており、高く評価します。ただし、昨年掲載されていた「社員構成の推移」が削除されています。情報は継続的に掲載することが評価上きわめて重要ですので、継続掲載を心がけていただきたいと思います。ジェイテクトの日本での社員は約48%です。CO<sub>2</sub>排出量はグローバルな統計が記載されましたが、今後は環境情報をはじめ社会性情報まで、常に“グローバル企業”であることを強く認識され、情報を収集し記載されることを期待しています。



## 第三者意見を受けて

株式会社ジェイテクト 総務部

2008年度は、第三者意見にもご指摘いただいた通り非常に厳しい状況の中でCSR活動を推進してまいりました。そして昨年同様に、循環型社会研究会代表の山口民雄さんに意見交換会にもご参加いただき、今回第三者意見を頂戴しました。

昨年度は、「ジェイテクトのCSR」をより明確にすることと“社会性報告の充実”の大きく二点の課題をいただきました。「ジェイテクトのCSR」を明確にするについては、2009年2月に「CSR推進委員会」を発足し、CSR方針を策定し、コンプライアンス、機密管理、大規模災害、社会貢献などの専門のワーキンググループ活動を通じて、問題点や課題点を顕在化させ、改善していく取り組みを開始いたしました。“社会性報告の充

実”については、複数の新しい項目で統計数値を示し、わかりやすくするよう心がけました。その結果、今回のレポートでは高く評価された内容もあり、ジェイテクトのCSR活動への姿勢が評価されたと自負しております。

また、一方では、次年度以降に取り組むべき新しい課題として、社員全員の活動を通じた、真に顔が見え活動のダイナミズムを伝える報告書づくりや、グローバル企業としての情報の公開なども頂戴しております。それらを真摯に受け止め、次年度へ向けて、一步一步確実に前進すべく議論を重ね、PDCAサイクルを回していく所存であります。そうしてCSR活動を推進することで、社会のみならずよりさらなる信頼をいただけるものと考えております。